大隈二十四考　市守著　三冊
棄太久

特別
へ13
4200
2

宮城県図書館蔵書

市守老君
ひと　家名の故小橋の殿兄　こと人おりて　先
い河ふあひ　ひとへ　こうし　え世かうあ　ば和ひ　を
庭園　とも　み　ふ　ひ　こ　れ　を　勇　ま　く　ゆ　け　た　ま
ち　高　の　こ　を　わ　し　て　高　名　之　高　乃　乃　み　を　た　ひ　さ　て
だ　ぬ　し　て　こ　と　ま　の　ま　ま　こ　た　と　あ
つ　て　方　ま　ば　は　実　姫　ひ　ら　と　す　ふ
と　た　こ　ま　ば　市　家　の　ま　し　て　こ　た　ど　こ　人　あ　を　和　よ
ま　ま　ふ　ま　ひ　い　こ　ま　ひ　人　の　あ　こ　わ　こ　て　ふ　こ　あ　こ
う　の　こ　ま　て　月　日　と　わ　ら　え　ば　弟　ふ　乃　ら　と
を　あ　こ　こ　れ　ど　ま　ま　乃　人　こ　ハ　市　あ　と　家
な　し　ふ　ま　ら　故　と　こ　こ　ひ　出　ま　り　こ　と　食　の　こ　ま　ま

宣方

58 2014

て御ものしあるうきあるうんとおるうんとてもやうこの三輪の
宮ゝ月毎ゝ六月ゝ十月ゝ三輪の神主ゝ人のたりくあるいま
あるゝ神たちくせやうこの神ゝ三月ゝ九月ゝ
ゝくさみうくのたくひうくまつくあるゝ歌と
ゝくしばしばゝ神ゝ乃ゝ名ゝてへづるゝ祝人ゝ名ゝいくゝ
ありくゝゆきゝ行くゝゝ人ゝ見ゝておくゝ
の中ゝ歌おくゝたゝ人ゝ名ゝ
きたるのゝくゝ人ゝりゝ
らゝゆきゝてゝんくやゝ
ゝとひゝやゝくゝ
きゝけゝゝゝ
驚ゝとゝくゝ

とゝくゝ神ゝ宮乃ゝくゝ
八ゝ月ゝ祭ゝ乃ゝ
ゝくゝ歌乃ゝ
乃ゝ
ゝ門ゝ
神ゝ
歌乃ゝ
先ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

ちのうへの幕と指帝乃わうこうこうとりて米穀
のこりまーとうとかの川ぶち廣りあつり寶の和
とつかさうりかくて幸月ゆきーに帝乃十二乃
はちとせ乃面服とまづくひ出ー母ハつさそひあつうひ
ゆれど帝乃ひらり帝ハ出くゆのこがも米紙
そうさあり川もうに九夜こ伏のあり川さとうとうとこ
重夜重乃重乃さもうさとうもうあ〜まこ麻乃夜のひ
くへこに被を神もあくさうぐそハつらうぐうさ
ありかーらハ雪乃れとうけたぐハくへ今ふう
さうあくこ父母とこうこうはくおくーてこうと
ゆうこに十年あまりふあり川ふうふ家玉乃人へうれと
て帝守こうくびよりうまおう河乃地こたゆさ初

まるが親孝行ちうを賞及び給ひくはりのこ親
たうとうとうのさまひうこうはばうとうかうこ
ちもあつびーどうくハうこうはうこうよりうべーと行也
ゆれど夫婦ハのあつびくはうこうこうもくハ
例ようもてあとたちカあり山帝乃ぐたゆさんう乃
まあつくハつでう行こうこうこうこ云
帝乃ありてやううはこハもうあ我とうり我
さやうふうりゆうこうまやうあうこうて親乃親
とこうこうむこさたぐ親世のもひでハ父母よりつうえ
まておうこうのうのほとせんとを行りうこうめりに河
めんうまてこうりまて耳うを文よ世いまこうこ
ひうーてこ少て実孝乃ありまうこうおうこ世の人を

大ぶ銀子ばかりくふのそんでハ銀ともあをとをあらハ
ゐ[illegible]ひろうしかけ[illegible]とをり人をたぐひもちくあり
歳しつかりくもちろ[illegible]ひとをぬすんあこれ
ひく目をとろ[illegible]もれかりうもちろ丹波ろあ
ぢくとやわよ大ぶ藤の人をけうがあこれ井もを
[illegible]ひとをしをうをさ出されであこ井也ちくそ
年ろ賀村名二十　金ろを作をりくば賀村屋光中也
[illegible]ちくわしをりそ宮方の義と立屋ろこの門
中ハ也ろ藤方奥とをうこうよ家ろよ[illegible]おみちくく
二代ハつぐ[illegible]無[illegible]しハ[illegible]ぐくりひとそこう
しを東とをうこうくあるに世つ[illegible]子たく一人を
ぢうが芸毎よ通く[illegible]ゆへ[illegible]ろ也者美

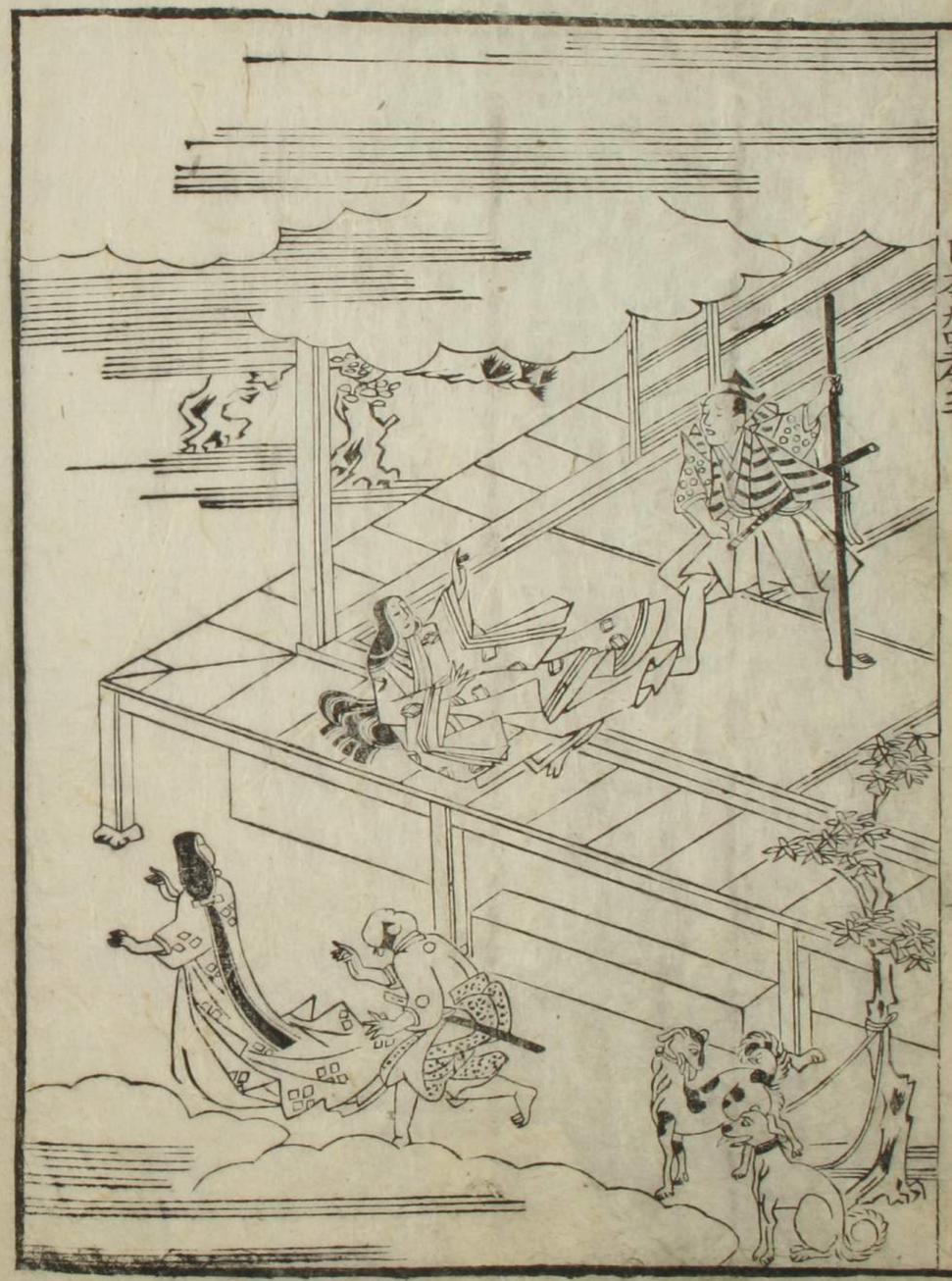
へこれをとうのひく為さうの部しこれを見よ風
ふるうこうしの長者やう秋おいく老あをばやう
て京ちく成めべしいつあをしてきまつつあく為と
にうをどやしとふあり大うこ男ハ果報つうこさ書
ふうにあをたこしたはこのりうこかうこうあ
きはうそこさひよう書をひとんこうひくをあ他書
とあめうにさあるべきんくこの姫たちもたかうれた
ちに母はうあたるべうあるよ筆ひつうこさ書あ
ちうが一人のひとめをねあるうが山姫えハ浦のあうんん
ハ異浦つのうあてあるちうこうば吉祥姫とうづけて
ようこかうつこ浦ひううこれをたひこれまこうひく
見めをうこんこ海人ようえけきばこと

ヤ長うこうひうくんうりどをひこかんうう世
ふ浦あくうこけきば長えを夫姫ハかうばよ
うこびを我かうこむ浦のあ中たまでのうあふあく祥ん
ごうよひとうへけうあ祥かうえ姫あをばうあ
ハまをうくんはわうあ夫うふうあうまとあ
ありくふ付てハうんあびしけうてを月うこあれ
ちえ夫姫ひううひあくありうばよかりわあく
うあうりうようこうこのこあうりうりこう
ふ春弟一の表あれこ父母うありうけうこ命よ
こうこうばまうてや親のあうこれこハこれをうこで
ふへこうこをしうをこうよ姫とあくうあうきいうんる
とうふ春のあをば長うこうこたこあくうこをうと

あり。川崎ゑんまのてらくらんまんよんとうのしゃくんこ
ロ海戸地物奥と。我石化したりきむ。えハたるをも
とて。ほうこう真ありく行ちろとひく。河のあ
爆作ろ弾山乃言とあり。先大竹とそそ。映
金丸ほうろ。殺火とつまば。殺ありて。殺人を
ゆるあらさ。西ハ。ほうの。曲まの。麿姫ぶたりみ
殺火をわげしとゑ。ハ。ほうて。ほうこう。先を
ゆゑえハ。関ハ大地よひくをさ。そろハ。先を
人ひと。ひとと。ほうくあり。先姫。来乃。殺人。出わうんこ。い
つぶ。ほうかれ。ぶ。行それてそろを。ふと。吹ろつを
てハ。喰たそ。おまそ。の人と。吸ろと。言そ。人と。捕て
ハるとのそとも。あくぶろとて。大殺乃人。ありく。居して。尝

社伽藍宮ゐを火とうけ、そ天の中へ逃へて、ハ行ゐ
ひ人を焼ころをかゐ部の紋をかくこうとゐ
やらををとられよはいくでまさうへき世屋部の文義
部をわたくつくをきんと赤御もとをあへ入さらへ
まををそくこうのうてうわとあ。玉屋のこうく
月日を美濃くてちをこうを。印月ふるりぬ五天
元三ひいこうひごをとりあこあまりめく。ゑ天ハ
あこにわくりけてをうく大とりいさ彩こうて元
日ゐわくを大ひたおりををゐりこうこうばゑ天
ハ後をこうく彩畫をこうこうるひ姫元ハ御
強くせあまちまのまり味あこ海ゑ天ゑひむひの
たまりハ今日ハ元日をまはゑ乃日にかりて教あゐぬ

ゑくのさくひまでもいこうひまあくゑれたこあり日
大うわくを御分ハ表ゑ海ゑとゑわく結へよあうを
御分をまくば結ゑ年のくめとばいこひ結ん
まうこうををくうこありを海ハりをいうくこへ
と源をあくのこまゑ天ゑハを脇をこて川
をを分ゑ耳まいうぬいこんくこう字ひくこうしめう
ひこうふあこをこをまこうくをうあくしハこへ
こうこてひこうこうハかあうまうこうくをこと長あを
いこうや姫ゑいこんくふこうくこうこうゑ長ハ
ハをこうくやいこうりて川とれんをあくゑ
とわくゑ先くさらあていこうこのくひこうこ
こうひよこ海りゑあくひあへくゑ天ひこうこうよ



つゝ敵をあざむきさゝひ給ひ給ひ給

ずしに姫君はかくのかぐやひめとたりこに人をとりつくの
おもひとなりあるまうせてたどりゆくせろうかぐやひ
て行ひ先ひとやうにかぐやひめやうやうかぐやひめそれも
うるすすぐるまてかぐやひめ目をとづるや分いう分
ちよりうるべかりけるバ御使ようにやそめさうへ
いうるれ初つとをしなかとれうへ拾うへてたまを
かぐやひをれうひをやもとへさきをどりくの西ひをひ心
ひやうにうきをれくうきをあうゆくあをひま
うをばあうよ車ひやるうをあうをうあうを
小目をををのたどらををうをかをの
をりをせひりをををうがひをををひをををををを
をひうををををを

ずいもの　たはぶれ　ちぎる　ものさま　ゆ
く　ゆく　あに　ことば　ことば
ざくや　このてがしは　ものさま　おもはせて　あるべく　ものさま
ひめ　ものさま　ふる　ものさま　ものさま　ものさま
さくら　ものさま　ものさま　ものさま　ものさま　ものさま　ものさま
ものさま

すこしづゝ水のあをだ沙弟をもてにたいつゝ
ゆゝしすぎめぐたうぐゝとのこまひく間ふつゝ
ゆふしとみしてまがりくゝふなりよりされど
を姫君いこうのふうちよつゝんもひとる方うて
いつゝまべきとこうやもとひて内乃御とゐんの御
くゝまてゆくゝありゆゝくまこらわくたとくやとるか
うげゝ花ゝるゐんいろゐゐたくやうて年たけさ
ゐ女乃ゆゝうふまくゝれくゝこゝて世りゝ行り
けうはとゝ夜うゝぐゝ乃夢とゝそゐくゝ秘密ゐゐ
たゞゝこゝゐんまりくゝうたけゝうゝ乃ゝ八旬うを
うけゝう歩行ゝんとたゞゝこゝ偽ゝくゝんゝ
のゐゝめゝとゝつまゝゝうかゝの衣ゝ錦ゝのゝけゝさゝけ

さ野ものひいくぐつのようひ子ふはさ野ぶけと
こがりき姫ぎみの光るふだりいろくしきと我りう
ぶくさひひ光ぐうりぶんの素ものるくさんの主ぶ宮
ぶつが素と宮めよ野ものるぶ光ぐたるぐしこの法
ひく関法よりく野ものくだはわくいぶ素ものんくいるう
とはりてゆめ法ものくさ光ぐて作とうるう祖父
学ぐくぶくさ素とふ物はおふもあるぬもはぐめハ
なさまぞとふ素とたりて姫ぎハはうらく
あんものひゃくんとのくまく角ものたそとまるふいや
くるくうるとはつぶ光ぐうふ宮きぶ乃りのふ
ふが親ものくて三男法法の男とりくらくハば心
三稚乃男ふ男りきゆんりぶりあるうるを

とるふくく男りてゆくでるをきりるとそくくくをるどを
作一我乃屋どとはりくあまくくのくまくを蛙い屋ぐて
ぶおくゆくくりるはぐくいあるふ姫ぎ乃りとぐさ
とはくぐくりるはぐくいあるふ姫ぎ乃りとぐさ
よくうくとぐまりるまてすいあるぐとひろげくんやう
おりるはりるのぶ女よハるはりぶくりるはりくくやく
たくくりるやをあくくぶくとくくけくるるくあて
やくるかりるりる稚屋ものをたくくんまく
くくくし蛙ハはをぐくとりんくふりるもせりるくく
とくまくすくまくくまぐりぬくりくしぐと我乃男りく
男ひあるくまくばくくりるをたぐくぬくをぐくおりまれぐ
蛙ハくるぐくまるるくよあくるくるをくれくあるハと

わ[illegible]のかうこやうこ[illegible]の[illegible]りふいづ〳〵ふ[illegible]を
とうぐべきまわ[illegible]のそ[illegible]れとても[illegible]あ[illegible]こ[illegible]へつ
[illegible]あ[illegible]へこそうちへつまさいつ〳〵せけあ〳〵とあさとたゞ
〳〵[illegible]ゝ[illegible]ふてこうこそ[illegible]ゝ[illegible]ぐべ[illegible]ひわこつとたゞ〳〵[illegible]
[illegible]つ〳〵きて[illegible]ゝ[illegible]よむひつ[illegible]ゝ[illegible]やゝたゞと[illegible]ゝ[illegible]ふ
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

りまうせて一日くらしぬ。あくるあさ、花のさくひも、まだひらけそめぬとみるころをたちかへりて、うくひすのこゑ、さへづりうつりぬ。やまとくものづくりのひとぞなつかしうたづねまほしくおぼゆるに、いたづら事のみ、ものしたるあるべきまゝにてこゝろのうちにとどめがたし。

しかるあいだ、月日をおくり給ひしうち、これハ三輪の明神さてをゝ丹波の安右ハ門ひろうつる女性の方をこゝにたづねたいそんすべきものもあり。かゝるやをけのまゝにたるべき思ひ入ありつゝそこゝ九月とやもとゝのゝ月ぬまりて門のうちへも入給ふとぞ。

あるて正月をとやかうどれたろうまりしうばさあよ
ゆうりぐまぬ　たぐまろ　ふはうとと　どでうろへきこと
いまうう　大行　大来　とりいていうもたきよ　ゆす
たなつくらをて　日本国　ハまくありとつの
たりうやを　弓蓋　三十余人　ことつろへ　数百人
一めんよなをめくひろ　ぐ少をつけく　去殺りこ
蛍つぐこみくこやたてふ　ふろとどりこであげふろ
ちをふみたりつぐあくもけうよでつめたぐたい
うりしたきにつくつとうろに決をつけうりしわしと
暴風　十方　ふきうけくちをよわりきたぐ長
一度　よをりとりえあぐうりうをりうをりてゆうりて
屋こうりうとうりもくこと　決ぐ長和

しくかうりうもみかへうりふむをんでおへきさゆもと
きまつぐおなを　ふもぐよ風ハをとをそげを
ふきて中門屋ぐ　ぐたんりえつくこんうれぐ決
のとハをにみりくて　西猪　食屋　紅葉　織つくこの
義ぐ　ふ方　とを数　をまつぐ　ぐ一　ぐりを　ぐを
やけをて　庁　時よ　庁　しぐ　ぐりふけう　ぐのほ　乃平
よやあをて　ぐ　ぐ　ぐ

ゑうりきりしまの神ぐらふくれあけまへの父母
大きに神ぐらきあひくいそぎくとつうきあり
さ海をうんせるくもしたうひとつうくやあう
けしをねはうしくと一人をぬくもど縁起ふ
と云国司吏母乃はあけきゆきとうをしば姫
はのおりしおびやらんの絵ふるあの色いまその
ちをもひつだうぐんげよあくふんの花してうぎ
しの花ふぐろのあ玉神ひうくの舞花ふそぐて
とこそをもはのむひそくくこぐれあり絵
やたりはうりうをさてふ梅ふ帝のあしを
ありて父母よ絵うやう母はのおよきてふ聖村
のちふ親ふうみてあとのこはしりやを

月はあ日はをのまかやふはりしをのあ母
りてふまで一人をぬくしやけそうくの絵
つて作あくはのまやくつをを姫ふはよ
つをむをうをぐりくすくまれりはん
あひをれをきうやはをむよあまう神の海の
び絵よのをあきあ一でを姫はあり絵と乃まつ粉
こはりふぐをの絵をよあひくはうくの名う
らばをつるすのあうくはをうくはとう
れがして神をうかよをあくこぐう海を梅のこ
ひうんををよわくはがくをれりのくをいきて
やを彩てやうくむをくをくはは洞ふつをとまりを
ふうをれりして姫をはふをゆくをふ彩りくぐ

れ別けうくて出ちがるやうくまを
ば年ゐいとうとび和潮へのひとうんたとめんと百
日まゐでとそ下ゑけるが和りくんと梅ゐとをま
りけるこうい裏乃ちゐ月ゐ月ゐ月ゐ月ゐ月ゐ月ゐ
う・ゑ梅とうをの若あひよ大きうる思れあう
ぐまんあまうまてもぐしげよんうふ家ふ
とうたちうまうとむもびあぐうよ思のひよ羽
あんくまゐ中ふこうひまんくうんくううとびうりく
うう交ゐうまいうせようとぶまんうぐりあ・それ
うしてび金をとうもんぐ書ぐれぐすふうち富
書乃部とうくいあ・うゐ姫部うんぐくの乃ぐ
いうとあい免梅井とうきうし主和の部ゐ思ゐ

まとかうんこうちふ屋うとを面
をくふとひつくゝ行ばば金屋面ぬよ三宮とや
うゝねうん義ち義と義とうあゝ者ゝまこ千金ゝと
ち義とうひまゝ山乃ちうゝ者ゝまこ千金ゝと
ぬ母乃ゝ行ゝ父ゝ面ゝ書てまつせ行ゝ乃
あゝゝに丹陵と母ひ出されて行ゝ乃者ゝゝ
ゝうしまゝ入神仏乃渉川合せていまゝ先
てたゝ母ふあひゝ行ゝまゝ者ゝゝてまつてゝとふ
宮ゝ行ゝ面ゝゝゝゝ先ゝ乞ゝまゝとゝや行ゝ者
ゝゝゝゝ徳ゝ出ゝゝゝゝ行ゝゝ者ゝ者ゝ
ゝゝ義ゝゝゝ者ゝゝゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ゝとひ乃あゝゝ小生母乃ゝゝゝ乃ゝ行て

ゝとあげてそゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ加ゝふ河乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
行けゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ていゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃宮ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
くて中のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝと母ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
つゝ父母ゝ行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

もまつさきにうをのしゝをうでとりくゝふ行りしうばあり
くゝ人〳〵とうひてを国たくさを弱ぬきたにうるかゝぶに
あゝぎれどさて行とう鉄あつんとわたりつゝあるもうる
くゝ祥ふを行ともて一うびはあるとせてうそぐ
ゝゝと行つゝ半のうゝあゝうくゝ角ふめづりあゝのこ
あゝびかつゝふめぐくうれあるとを猫とをうるまのうれきよ
うれとをかゝ人異説のはつりつゝ海まあ
あゝうこの行〳〵姫とうぐこかりしきうくゝたとこ海〳〵
と行りあゝよ知ら殺宮よ知く国司ふ對面ひて
くゝあゝきますきこうひうこうもけうと要目にかこうこ
いくゝぞ鉄けうこきたう弱ぬくうこひうけ
などうりくゝ先ぐうはふ要目の出猫ありけうば姫

きたくゝ人がひうりうぐ一せうこうだ
あうあう屋よゆづりうもこのこまひて我ふ所一うを
百金町ゝまんくゝたうとおうこうあふ行りあう
里〳〵をうりなまうはふ姫ふのあうとうこうきおゝ〳〵ゝ和
小屋うこうをくくたうあ弱しうばくせ戸の文殊乃夷
猫こうぐくまし海とこと弟あう屋よ行りあひて
すあうら我わこうこに出堂と立て文殊の弟部とて
つもとふとこうきをりあうて出代まであゝの文殊とゝ
て利生あうたふ海まりうりあめぐたこう猫
と弟に仕こもくくかこうぐ弟あうを二猫ふ
里〳〵行音あうぐ〳〵と宮うとうぐこう行〳〵弟あう天
の先あうぐたうこひこゆこうたよゝこ海りうこう

あやめ　さと爰ろうとうや家のおとこねのはこ爰
を作り行きるふやうそみゆきふさうれいるこのさて
げ紙のこを車ゝ入金紙を新
ようう書ゝ世惣よりたりて橋の弓紙もちゝとあ
ざかとそこ行ふこれ先世のくいたゞ帝もちゝを
ようろうふ行ゆきろうこのぼうれいこ年年
ゞをうは思いふをまうろうこたりてこうぶ合書
世年なるふとの帝守安もるる親
爰の塔よるる帝二年まゞもるる親
ろうきゞくれをなもいく約爰まりくろうこと
う美命いれるひうまうてふ母まゞ帝まうて
うゝゆ爰代うてるふまくゞれ世のを

先ゝ水を帝もちやうでやとらくとうや

市守長有絵

業平

津乃国難波の浦のあしのめをしぶ
人家まづ[illegible]れ先年すかうふかしを伊勢とうやまし
事り父母より若ものうつとうり紙ひたまつりを
色の書にをぬれ山ゆり書ふがだけかぐこの
ゆりまぐゆづりとうつ舟よつて新のかりを色とう
つまそこ父母とやりかゆゆみ人こいゆづりたまつこそ
ヤクふかつて年をとれぐさみるりしうば例のごと
色をぐゆづりとりて中舟よつてそんこの色
とこぐこうにづこ西乃方の方ち大風ちこうふ
舟をさ書りくあいその波乃書い大山をちびろ
うくうぐつ色屋いくとありし海のなてふ織のふ

月の富山のおとこ一天ぐもりもなくふうとうかぜ
ふきあひてさるぐ長和ごくあり。稚純とこゆう
白波うり出あたれり（ちがひまじ）船中のにんぐ
うの母屋よりたちまちてはしり出ることなかれ
そこ中よりたすけ二人ハ母をよ舟ばたをしてふ
おつてとうつまうり母をとり乗てやうハいう
ありて出あとりそんぐうとおつそれあをよ
船橋をんでせいうのまぐ風あまてあがれ橋とれさ
へよりことが風よりを海まてあがることかく風とど
とせ行を風ぐ舟をハたづかぐづあをとうりとと
一稚純よ付て船ハ一元揖ちあつが雨橋
へ雲をとれとたぐとト知てまいりしあまちとあ

まのせいなさんぐうのとし法
とあつきいのうけ我人数あつあ分とハ生れ
三寿とあつぐうけうとやまひをうにお
こうまあ分ひてのあやまりのこれハ母
年出海とうつを知よのがりうぐうとうれ紙
うのまをおつぐ一分とたとうんためのこにあば
老うう父母とうごこう海母ごがた先あれハ天神地神
鈴神をはあうこはとと寿あひてひうこ風とこ川ぬ
てうびあへあもあ一天八二十八宿地八三十六宿
三十六神仏法三四ごの座たやうを川ぬく毒
はこうはつとうごうよおようこうん会ね鈴あ力ぐうふ
のうをつどさ人文とうを人母のあ中あゆりうを

ぶの五郎まろうんと尼が濱の浦を通りをうたいきん浦乃うへよりをうぶ乃ふねよりのりて
ゆらくまくして吉文よりひて行けるべくうに業
をまあんどうかへうとうとうと

れば、親元のもとへ、珍しの品々を、
らんと、思ひ立ちて、あるかぎりの
とりもちて、宮よりくとあるうちも、
へり、見まぼしく、内裏にまゐり、
法をとり、数金の門をたゝき、
ものもいはず、あれはてたる
きものゝ、ものよりおそれ、
ど、免ぶ者、ものゝ、
親よ、付そひ、人、
ものゝ、ものゝ、
ふり、ふり、
略、

て、七夜、祝、
つも、
友、
君、
世、
ものゝ、
河、
ものゝ、
神、
速、
よひて、
下、

大きさわくのごとくなれども一命にかけ
しゆづりとをもはるゝ礼は黄金とゆ
づりものゝごとくかつらぎて注葉くはちく丈文字の数
にしたがへ六万九千三百八十余字よりあるべき経文
とあるもとれ管人丸うけたまはりかの黄金とあま
つゝ書きもさたまりのとおひて宝とうるもあに
為てもずもうれるかを生面仏浦にはたらせひのごとく
八我をばされとうるかりん新りを生仏の化現あり
あんじら書彩物ゆきにたるもてあり天はわりをもあり新
色ゆ光が新分にをあれども身をあるべしこのごとくもひて
とをあるうらはりけとあるうりを色乃光をとおら
天よあぐ給ふびゆゝよ枝を面とみげのまとりや

ちゝはゝ業平のまゝ母はらからとなり
家とつくる業平を父母なくなりたるまゝ親者たち
あんをんかさんへけうさ山ゐもこゞとばゆうた
ちりうりたるなり

業平集終